

海外での経験を地域の復興に ~TOMODACHIサマー2012 ソフトバンク・ リーダーシップ・プログラムに同行して~

各国からの震災復興支援は、被災地への物質的な支援にとどまらず、今後の被災地の復興を担う人材育成へと広まりをみせています。各国政府による被災児童・生徒の招待、日本政府による海外の学生との交流などのプログラムを通して、学生・生徒たちは大きく成長しているようです。このような海外との交流をベースにした復興支援のひとつ、米国政府主導のTOMODACHIプロジェクトの取り組みを紹介します。当協会の大山美和主事が同行しました。

1971人の応募者から選ばれた岩手・宮城・福島の高校生300人が「TOMODACHIサマー2012 ソフトバンク・リーダーシップ・プログラム」に参加しました。米国カリフォルニア州にある名門校カリフォルニア大バークレー校で、夏休みの3週間、リーダーシップや地域貢献について学ぶサマーセッションに参加するというプログラムです。多くの生徒にとっては、初めての海外体験です。

12年7月23日。大学に到着するとまずは、これから3週間生活を共にして、サポートをしてくれる現地のプログラム・



大学のキャンパスにて。

コーディネーターやアシスタントが出迎えてくれました。生徒たちはそれぞれ希望するテーマ(住宅、商業と雇用、公共空間、エネルギーと持続可能性)で25名単位のグループに分かれます。各グループには日本人のアシスタントと現地のアシスタントがついて、授業やアクティビティ、寮生活をサポートします。

高校生たちは、Y-PLAN (Youth Plan・Learn・Act・Now)という地域のリーダーを育成するプログラムを受講しました。約3週間にわたり、バークレーの街を知り、改善のためのアイデアを考え、バークレー市当局にそのプランを発表、そしてそのアイデアをまた、東北に持ち帰って、それぞれの地域の改善に役立てるといいます。

クラスでは、現地の教員がプログラムの手順に従って指導します。高校生たちは、生徒とやり取りをしながら進めるア

メリカの授業スタイルや、机の上にペットボトルを置き自由に飲みながら授業を受けていいこと、授業中に自由にトイレに立っていいことなどに驚きを感じたようです。

授業では、バークレーの街を歩き、調べ、自分たちの街と比較しながら、街を改善するアイデアを出していきます。たとえば、「街中にごみが散らかっている。ごみ収集も大切だけど、その前にごみを捨てないモラルを持つよう教育が必要だ」「自転車やバイクが駐車スペースを占めていて、ここに自転車置き場を整備するといいいのではないか」などと、具体的な改善案が挙げられていきます。これらのアイデアを基に「誰が行うのか」「どのように行うのか」「予算は」などとグループで話し合いを重ねて、アイデアを実現可能な計画にまとめていきます。バークレー市役所の当局者に向けてのプレゼンテーションの前は、夜遅くまでポスターをまとめ、英語でのスピーチを練習しました。発表では、ガチガチに緊張していた生徒もいれば、ステイプ・ジョブズばりに堂々と発表する生徒もいました。

このプログラムを通して、大切な仲間とも出会いました。熊谷祐弥さん(盛岡北高校・3年)にとっては、「こういう機会がなければ知り合うこともなかった宮城や福島の仲間と同じ痛みを分かち合うことができた。これからの人生でも仲間もいました。」

また、平日の午後や週末には、サンフランシスコや州都サクラメントの観光ホームステイ、地域活動への参加や地域民との交流など、アメリカらしさを満喫しました。

仕事がなく、住み続けていくことができないんです。自分の暮らし、仕事、やりがいといったことを続けていける環境が必要です。いろんな支援が入っています。炊き出しなども支援してくれています。一回だけで終わるものもあれば、続けて支援してくれているものもあります。時間がかかるものどれだけ寄り添えるか、そして次のことを生み出していけるかが大きな課題になります。

被災地では、仕事がありません。しかし、むやみやたらに与えるのではなく、「適正な」「そこに合っているもの」「使えるもの」をきちんとサポートする技術の移転、情報、知識が必要になります。ただ教えればいいのかというものではありません。そこの人たちが使えないといけません。同じものを持ってきても実際には使えないということが多々あります。現場の声をきちんと聞いて、その場所に合ったものを見極めたうえで支援したければと思います。それには、Globalなタカ視点とLocalな虫の視点との両方が必要になってきます。

私は堤防を造ったり橋を造ったりすることはできません。でも、町の人を少しでも一歩前に出られるように、復興という形を変える、自分たちで力を付けていくお手伝いはできます。生き生き暮らしているの夢が語れるような町をつくってきたいと思います。

「ひよっこりひよたん島」がある大槌町。テーマ曲の歌詞にもある「だけどボクらはくじけない」という言葉を励みに進んでいけたらと思います。

だけどボクらはくじけない ~大槌のまちづくり~

NPOつどい~大槌のまちと人を育む~を立ちあげて、人と人のつながりを軸に被災地の復興に取り組む元持幸子さん。いわてグローバルレズジで「被災地コミュニティ形成と国際協力について」と題してお話いただいた中から、大槌の今と復興への取り組みについてお伝えします。

震災当初の大槌は焼け野原のような状況でしたが、家を建てられず区画整理なども進んでいないため、現在は緑が生い茂っています。仮設住宅は山の奥になりました。この先まだどこに住宅が建つか先が見えない中で、生活を組み立てなくてはなりません。先の見通しがまだまだ立ちません。でも寂しいことばかりではありません。9月21、22日の大槌まつりは活気にあふれていました。催し物やお祭りに人が出てくるようになりました。

震災直後は食べ物、電気、水、何もありませんでした。生きること必死でした。その後の復旧の段階では、電気、食事、医療などが戻ってきて、暮らしが少しずつ変わってきました。この段階では、支援の力加減、やり方は少し変化していきます。私もAMDA(アジア医師連絡協議会)という緊急医療の団体で、病院

が無くなったたり、薬が流されたところへとりあえずどん薬を届けました。しばらくすると保険診療が始まりました。無料のままだと地元のお医者さんの仕事が無くなってしまいます。どこかの時点でこのバランスが変わっていかなくてはなりません。復旧から復興へと移ってきたくときにどのようなかはまだわかりません。模索状態というのが現在の被災地ではないでしょうか。

田舎では、隣の人がどういう人かどういいう仕事をしているかが分かる。そのことが力として発揮されます。昔の長屋の良さを見直すいい機会になると思います。建物や道路を整備しても、それだけでは町としては動きません。そこに住む人がもう一度暮らしを作っていくことが必要になります。「町への思い」「愛着」「隣近所を知っている」「何かあればお手伝いしてくれる」といった昔ながらのいいところを大切に再構築していくことが必要だと思います。

震災後のまちづくりは誰が主体となって担っていくのか。この「誰が」というのがまちづくり、復興において大きなネックになってきます。町の人を「参加」から「参画」へ、そして「主導」へとどのように導いていくのが、支援者・外部者の力量だと思います。「やらされている」から最後は町の人自身が「自分たちでやった」と思える、その持っていく方、支援を変化させるテクニクや支援の考え方が問われてきます。

人が動く、人が変わっていくという過程では続けること、続けられる仕組みが必要で、大槌町や山田町といった小さな町はどんな人口が流出しています。

TOMODACHIサマー2012 ソフトバンク・リーダーシップ・プログラム

米国大使館と米日カウンシルが主導する日米交流事業「TOMODACHI」のプロジェクトの一環として、ソフトバンクが運営資金の提供を行ったプログラム。12年7~8月の3週間、被災3県の高校生300人が、カリフォルニア大バークレー校のキャンパスでリーダーシップと地域貢献について学びました。

良くやっていける友達があったことが最大の収穫だったといっています。

岩手を離れての3週間は、将来の目標や進路にも大きな影響を与えました。大槌町出身の菊池健太さん(同・3年)は、プログラムに参加して「自分が大きくなった」と感じています。アメリカで活躍する日本人と話をしてみても、これまで漠然と思っていた「世界を舞台に働きたい」という気持ちが明確になりました。

Y-PLANに本気で取り組んだこと、プレゼンテーションの準備をがんばったこと、現地の人々と交流し心を通わせたこと、仲間と想いを共有したこと、アメリカの楽しさを満喫したことなど、このプログラムでたくさんの経験をしました。

「将来、家業を継いでがんばる」「看護師になって地元の人を助けたい」「世界に羽ばたいて活躍したい」とそれぞれに将来の夢や目標を話してくれた高校生たち。それぞれの目指す道で地域の力になるうと考えている高校生たちの「本気」が伝わってくる3週間でした。

Profile

理学療法士として、大学病院リハビリテーション科勤務。地域医療や福祉の分野にて仕事を行う。海外での活動としては、イギリスの障害者施設にてボランティア・ケアワーカーや、青年海外協力隊にてコスタリカ派遣、内閣府国際青年育成交流事業コアリーダー育成プログラム等へ参加する。

東日本大震災時には、NGO AMDA (Association of Medical Doctors of Asia: アジア医師連絡協議会)とともに緊急救援活動を釜石・大槌町にて行う。12年6月より大槌町にてNPOつどいを立ち上げ、地域における地元住民からの生活再建に向けた活動を開始する。



元持 幸子さん

NPOつどい~大槌のまちと人を育む~事務局長

岩手レインボウズ—Iwate Rainbows—

英語を通じて子どもたちに元気を

陸前高田市と大船渡市に住むフィリピンやチリ出身の女性たちが、子どもたちを対象にした英会話教室をスタートしました。今年、大船渡市で行われた英語指導者養成講座を修了した菅原エルバさん(フィリピン出身)ら「岩手レインボウズ(Iwate Rainbows)」のメンバー5人は出前の英会話教室の先生として、楽しい授業づくりに試行錯誤を重ねています。



「始めは教えるメンバーも子どもたちも、お互い緊張していました。でも、歌を歌ったり、身体を使ってゲームをしたりするうちに、お友達になれます」と話す村上オルテンシアさん(チリ出身)。体の部分をかたどった紙を使った日本という福笑い(make a face)やカルタなど、ゲームの時間は子どもたちの「もう1回やりたい!」の声でいつも延びてしまうようです。子どもたちは歌やゲームを通じて、簡単な英単語に親しみます。教室では、グリーティングス(あいさつや自己紹介)などの4つのパートを、講師が分担して教えます。1つの活動はだいたい5分から10分で、10人から30人ほどの子どもたちが参加します。さまざまな年齢の子

どもたちも「先生!」と呼びかけてくれたり、親子レクで子どもと親と一緒に大きな輪を作つて踊ったりと、教室を通して嬉しいことや楽しいことがたくさんあります。村上さんも「子どもたちも、大震



▲(左から)菅原エルバさん、中名生口サリンダさん、松田ジャネットさん、村上オルテンシアさん、菅原マリフェさん

ちに一緒に教えることはまだ難しいと感じていますが、毎回担当するパートを替えて、将来的には講師ひとりです。子どもたちも英会話教室がとてな楽しい様子。1回目の教室でなかなか活動に入つてこられなかった子が、2回目の教室では一番前に並んでいた、というエピソードも。ただ、教室は「一回だけの行事として開かれることも多く、「先生、次はいつ来る?」と尋ねてくれる子どもたちもいます。ことに応えてあげられないことにもどかしさを感じます。いまは横田町と米崎町の学童クラブのほか、小学校の親子レクや授業参観などでも行っています。これからも開催場所をどんどん増やしていきたいと考えています。

仕事を帰り道に子どもたちが「先生!」と呼びかけてくれたり、親子レクで子どもと親と一緒に大きな輪を作つて踊ったりと、教室を通して嬉しいことや楽しいことがたくさんあります。村上さんも「子どもたちも、大震

VOICE POST—ココからはじまるプロジェクト—

ニューヨークで受け止めた
思いを被災地へ

日本を心配し、心を寄せてくれる人たちがたくさんいます。ニューヨークからその思いを伝える活動をしているのが、ニューヨーク在住の建築家 高橋こうこさんと内田三緒さんが中心となって取り組んでいる「ボイス プロジェクト」です。



▲ボイス ポスト。日本への応援メッセージには世界中の温かい気持ちが詰まっている

2011年3月19日、岩手の被災を知った米国ニューヨーク在住の建築家高橋こうこさんら7人が、マンハッタンを中心にユニオンスクエアで被災地に向けてのメッセージを集めはじめました。遠く離れ、直接支援ができないうちはがゆさを感じつつも、「心を寄せる人たちがいることを知ってもらい、元気を与えたい」と始めた活動です。

「ニューヨークに住むいろいろな人の温かさに触れた。それを届ける役目をした」と語る高橋さん。震災支援の活動の際、ガーナ出身の運転手のタクシーに乗り合わせました。「ガーナは日本の支援に支えられてきた。自分ができることはこのぐらい」と、日本円にして3〜4千円のタクシー代をおまけしてくれまし

海外にいと、現地の人々の思いや考えがあまり伝わってきません。昨年夏に帰省した高橋さん。援助隊を派遣してくれた国々への感謝のメッセージが日本語のまま掲示されているのを目にして、この思いが外に伝わっていないもどかしさとともに、自分でできる役割を感じ取りました。心を寄せてくれる海外の人たちの思いを日本に届け、日本からの声を

た。ニューヨークには生粋のニューヨーク人ばかりではなく、世界中から人が集まります。「日本を心配し支援してくれたい世界の人々を通じて、日本が世界の幸せを考え築き上げてきた歴史を実感しました」

メッセージを集める取組みは、地道な作業を手伝ってくれたボランティアの仲間たち、インターネット上で被災地への応援メッセージを集めていた「世界から日本へ1000のメッセージ」の村井裕実子さんとの出会いや、共感してくれた企業やコロンビア大学の支援を受け「ボイス プロジェクト」へと広がっていきました。



▲高橋こうこさん(建築家・花巻市出身)

Profile

米国ニューヨークで、応援メッセージを集めた布を縫い合わせ、被災地に送る活動をしていた「ホープ フォー ジャパン (HOPE FOR JAPAN)」の高橋こうこさんと内田三緒さん、インターネット上で世界中からメッセージを集め伝える「世界から日本へ1000のメッセージ」の村井裕実子さんが出会い始まったプロジェクト。

震災から1年以上経ったいま、応援メッセージを教材化し、震災直後に伝えられなかった思いを改めて届けたいと考えています。

外に伝える。その間を繋ぎたいと考えています。

「いろいろな国の様々な人たちが、皆さんに心を寄せていることを知ってほしい。そして『あの時励ましてもらった』と頭の片隅においておくことで、将来出会う外国人とも友好的な関係を築ききっかけになれば」と期待しています。



▲内田三緒さん(建築家・東京都出身)

平成23年度 協会の事業及び財務の状況

■事業報告(概要)

平成23年度は、新制度の下での公益財団法人に移行したことに伴い、役職員一同あらためて当協会の目的と役割・責務を自覚し、国際交流事業活動を通じて公共の福祉を増進していくこととし、「多文化共生の地域づくり」、「交流による地域づくり」、「次代を担う人づくり」のほか、東日本大震災津波の被災者支援活動を実施する「震災被災者の支援」の4つの柱により各種事業を展開しました。

実施した主な事業は、下記のとおりです。

1 情報提供

多言語(日・英・中・韓)によるホームページ(アクセス56,882件)や情報紙「jien go」(定期号6回、臨時号18回)などによる国際交流関連の催事情報や大震災関連の各種生活情報の提供、機関誌「いわて国際交流」の発行(2回)など

2 日本語学習支援

在住外国人の日本語学習支援サポーターの研修会の開催(3回)、日本語サポーターの登録・活用(活用33件)、日本語教室の運営費の助成(4件/175,000円)など

3 外国人県民の生活支援

外国人相談(446件)、多言語サポーターの研修会の開催(7回)、多言語サポーターの登録・活用(活用12件)、私費外国人留学生への奨学金支給(10人)など

4 講座・研修

いわてグローバルカレッジの開催(8回シリーズ)、国際理解ワークショップの開催(12回)、海外体験・留学セミナーの開催(44人)、インターンシップの受入れ(8人)など

5 調査研究

国際理解ハンドブック「世界はともだちpart2」の作成など

6 国際交流の推進

国際交流センターの運営(来館者146,757人)、外国人との交流会「ちゃっとランド」の開催(12回)、「ワン・ワールド・フェスタいわて」の開催(国際交流センターのほか、野田村、釜石市、宮古市で開催。1,769人)、盛岡さんさ踊りへの参加(14か国131人)、外国文化紹介講師の派遣(31回)、いわて国際化人材の登録・活用(活用59件)、国際交流団体の活動費の助成(8件/639,000円)、企画展の開催(5回)など

7 海外研修員等の受入れ

海外技術研修員と県費留学生のサポート(2人)など

8 震災被災者支援

震災関連の相談対応(被災地巡回相談7回など)、被災地外国人等の心のケア「語る会」の開催(30人)、災害時に関わる調査研究、被災地外国人相談員の委嘱(3人)による被災者支援など

■決算報告(概要)

平成23年度決算は、経常収益の総額が6,771万円余で、経常費用の総額が6,561万円余でした。

経常収益は、基本財産の運用益のほか、賛助会員からの会費(受取会費)、個人や団体から頂戴した寄附金(受取寄附金)、岩手県からの委託事業や国際交流センター業務運営の委託金(事業収益)、岩手県からの事業補助金と社協力隊を育てる会からの東日本大震災「小さなハート基金」助成金(受取補助金等)などによる収入です。

経常費用は、事業費が4,991万円余で、管理費が1,569万円余でした。経常経費の会計区分では、公益目的事業会計分は4,448万円で、収益等事業会計分は543万円、法人会計分は1,569万円となっています。

平成23年度決算の概要は、右の財務諸表のとおりです。

■寄附金・賛助会費の受入れと使途

平成23年度中に協会が受け入れた寄附金と賛助会費の総額は138万円余で、それらの使途は下記のとおりです。

皆様からいただいたご厚志に心から御礼申し上げます。

1 受入総額 1,388,865円

○寄附金6件 211,865円(基本財産寄附金2件40,000円、一般寄附金 4件 171,865円)

【寄附者】(社)日本語教育学会様、(財)財団法人国際交流協会様、大山田収穫まつり実行委員会様、大畑佳代子様、伊藤友子様

○賛助会費 1,177,000円(237人、48団体)

2 使途

(1) 基本財産へ繰り入れ 40,000円

当協会の基本財産に繰り入れ、将来にわたって当協会の事業活動に活用してまいります。

(2) 平成23年度の公益目的事業に活用 1,348,865円

震災被災地の外国人等の心のケア「語る会」の開催、情報紙「jien go」の震災関連臨時号の発行、震災被災外国人相談の実施、いわてグローバルカレッジの開催、ワン・ワールド・フェスタの開催、外国人との交流会「ちゃっとランド」の開催、国際交流団体等の活動事業助成など、平成23年度に実施した公益目的事業の経費の一部に活用させていただきました。

■財務諸表

1 貸借対照表(要約)

平成24年3月31日現在 (単位:千円)

科目	平成23年度	平成22年度	増 減
I 資産の部			
1 流動資産	27,450	24,551	2,899
現金預金	21,894	16,694	5,200
未収金	5,555	7,856	△2,301
2 固定資産	1,108,192	1,050,336	57,855
基本財産	1,102,663	1,045,281	57,382
その他固定資産	5,529	5,055	473
資産合計	1,135,643	1,074,888	60,754
II 負債の部			
1 流動負債	6,571	5,499	1,072
未払金	4,253	3,396	857
預り金	1,008	603	404
仮受金	133	405	△272
賞与引当金	1,176	1,094	81
負債合計	6,571	5,499	1,072
III 正味財産の部			
1 指定正味財産	1,024,222	977,641	46,580
2 一般正味財産	104,849	91,747	13,102
正味財産合計	1,129,072	1,069,389	59,682
負債及び正味財産合計	1,135,643	1,074,888	60,754

(千円未満の数字は記載略)

2 正味財産増減計算書内訳表(要約)

平成23年4月1日～平成24年3月31日 (単位:千円)

科目	公益目的事業会計	収益目的事業等会計	法人会計	合計
I 一般正味財産増減の部				
1 経常増減の部				
(1) 経常収益	43,494	5,325	18,890	67,710
基本財産運用益	10,252	0	10,252	20,505
受取会費	1,177	0	0	1,177
事業収益	17,248	4,998	0	22,246
受取補助金等	14,644	327	7,988	22,959
受取負担金	0	0	117	117
受取寄附金	171	0	0	171
雑収益	0	0	207	207
投資有価証券評価益	0	0	324	324
(2) 経常費用	44,488	5,430	15,691	65,610
事業費	44,488	5,430	0	49,918
管理費	0	0	15,691	15,691
当期経常増減額	△994	△104	3,199	2,100
2 経常外増減の部				
(1) 経常外収益	5,500	0	5,500	11,001
投資有価証券売却益	5,500	0	5,500	11,001
(2) 経常外費用	0	0	0	0
当期経常外増減額	5,500	0	5,500	11,001
当期一般正味財産増減額	4,506	△104	8,699	13,102
一般正味財産期首残高	46,884	806	44,056	91,747
一般正味財産期末残高	51,391	702	52,756	104,849
II 指定正味財産増減の部				
受取寄附金	20	0	20	40
基本財産運用益	15,165	0	15,165	30,330
基本財産評価損	23,859	0	23,859	47,718
一般正味財産への振替額	△15,753	0	△15,753	△31,507
当期指定正味財産増減額	23,290	0	23,290	46,580
指定正味財産期首残高	488,820	0	488,820	977,641
指定正味財産期末残高	512,111	0	512,111	1,024,222
III 正味財産期末残高	563,502	702	564,867	1,129,072

(千円未満の数字は記載略)



SMBC日興証券

盛岡支店

〒020-0021
盛岡市中央通1-7-25
(中央通1丁目バス停前)
Tel.019-625-2525




それ、野村にきいてみよう。

野村証券 盛岡支店

020-0022 盛岡市大通二丁目2-18(大通商店街)
TEL:019(653)5000(代)

野村証券ホームページ <http://www.nomura.co.jp/>



エコロジー&フェアトレード!の専門ショップ

おいものせなか

〒025-0062 岩手県花巻市上小舟渡166-2
TEL&FAX 0198-22-7291

[定休日] 火曜日 [営業時間] 9:30~18:30(日曜は12時~17時)
※イベントへの出店や商品の発送も行ってまいります。



hokushu
YAMAGUCHI HOKUSHU PRINTING CO., LTD.
ライセンス番号
FSC® C007678

わたしたちは、
FSC森林認証で
お客様のエコロジー対策に
貢献します。

山口北州印刷株式会社
<http://www.hokushu.com/>

本社・工場
〒020-0184 岩手県盛岡市青山4-10-5
tel. 019-641-0585 fax. 019-648-1020